2021.3 月口語詩句月次選考総評　　龍　秀美

　やはり 3 月は桜のうたが多かった。日本人の芯まで染み込んだ感性を思ったが、その割には新鮮味のある作品が少なく、一般に開かれた口語詩句というこの場での“染みこむ”ことの強さと弱さを思った。今月は直接桜をうたわなくても、春と花にどこかで触発されているような作品を選んでみた。

愛しても愛しても
恋されるんだから嫌になる
作者　降旗　沃（東京都）
――「愛する」と「愛される」、「恋する」と「恋される」は違う。まして「愛する」と「恋される」の距離は無限だろう。

ある夜
各々の「好き」を武器にして
人々は闘いに出かけた
作者　いけす（東京都）
――「好き」以上の力はこの世には無い。それはラブなどという不純なものではなく、あらゆるものに物理的に適応される。この闘いはだから、勝った方も負けた方もエクスタシーに包まれるだろう。

サンバでは
国旗が必需品だった
作者　暮田真名（東京都）
――国旗が必要な音楽ってあるのか？サンバにはそれが必要だという発見。国家のシンボルではない。民族の熱とエロスの猥雑な力の現れとして。

恋をすることが歌人の資格と
言われたようで
歯を剥き出して威嚇する夜
作者　佐々木みつる（東京都）
――男と女のことで分かることはたかが知れている。まして恋なんて。馬鹿なことを言うと噛みつくぞ。

おれの右心房は
うれしんぼう

おれの左心房は
さみしんぼう
作者　田中傲岸（熊本県）
――楽しく口ずさめるわらべ歌のような・・・。

殺人犯が捕まるニュースを
見るたび
私ならもっと上手く出来たと思う
作者　まちりこ（埼玉県）
――加害者になるか被害者になるかは紙一重だ。手際の良いものと手際の悪いものも紙一重だ。現実世界と虚構世界もそうだろう。

拳闘させていただきます
折って連絡いたします

ビジネスは
このくらい暴力的だ
作者　田中傲岸（熊本県）
――全くそうだと思う。40年間ビジネスをやってきた筆者としては。

おままごとは
どっちかが飽きたら
急に
殺伐とした家庭
みたいになるね
作者　春町　美月（大阪府）
――「殺伐とした家庭」はときどき「おままごと」の様相を帯びる。

行間を泳ぐ魚が句点食う
作者　長谷川柊香（宮城県）
――日本語における句読点のあいまいさと困難さにはまったく参る。ズルズルと続く文章の波間を自在に泳ぐ魚を私も飼いたい。

坂
降りる

へつらうこともない春は
作者　大橋　弘典（群馬県）
――春は本能のままに振る舞うことが正しい。